

平成28年度資源評価報告書(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成28年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 マダイ

学名 *Pagrus major*

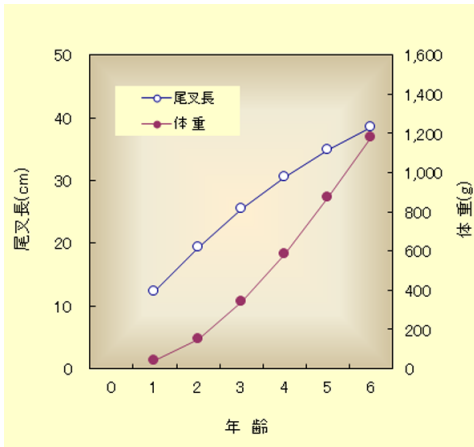
系群名 瀬戸内海中・西部系群

担当水研 瀬戸内海区水産研究所



生物学的特性

寿命： 15～20歳
成熟開始年齢： 3歳（50%）、4歳（100%）
産卵期・産卵場： 3～4月上旬：伊予灘、5月中旬～6月中旬：釜灘、備後芸予瀬戸、安芸灘
食性： 甲殻類、多毛類、昆虫類、魚類
捕食者： 稚幼魚は魚食性魚類

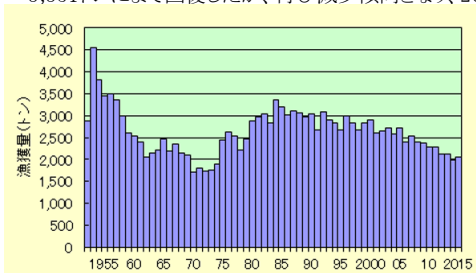


漁業の特徴

主に吾吾網、小型底びき網によって漁獲される。瀬戸内海漁業取締規則により毎年7月1日～9月30日の3カ月間、全長12cm以下のマダイの採捕が禁じられている。瀬戸内海中・西部海域は日本におけるマダイの種苗放流事業発祥の海域であるが近年の種苗放流数は多くない。2014年には144万尾の人工種苗が放流され、放流魚の混入率は0.1%、0歳時の添加効率は0.00と推定された。

漁獲の動向

漁獲量は1953年の4,552トンから減少し、1970年に1,715トン(最低値)まで低下した。その後増加し、1984年に3,351トンにまで回復したが、再び減少傾向となり、2015年には2,047トンであった。

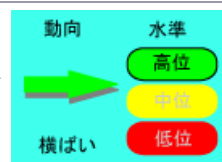


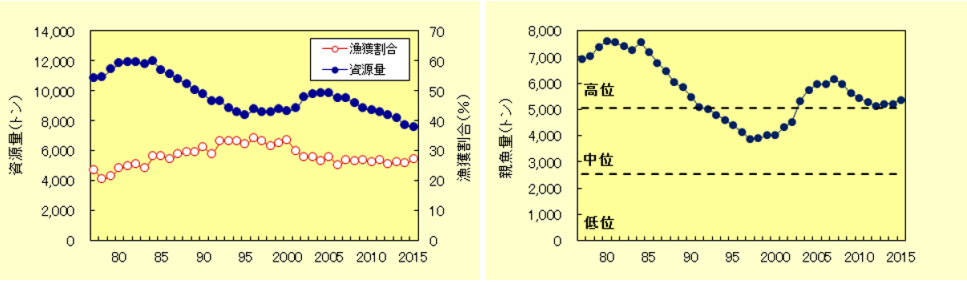
資源評価法

年別年齢別漁獲尾数を基にコホート解析により資源量を推定した。2015年の0～5歳魚の漁獲係数Fは各年齢の過去5年間の平均値とした。2015年の6歳以上魚の漁獲係数Fは5歳魚と等しくなるよう探索的に求めた。

資源状態

資源量は1984年に最高値の1.2万トンとなった。2005年以降は減少傾向にあり、2015年は7,559トンであった。親魚量も資源量と同様に1984年に最高値の7,570トンとなったが、近年は横ばいで推移しており、2015年は5,372トンであった。資源水準は親魚量を判断の基準とし、最高値と0の間を3等分し高位、中位、低位とした。2015年の親魚量は5,372トンであったことから水準は高位、動向は直近5年間(2011～2015年)の親魚量の推移から横ばいと判断した。





管理方策

近年は資源量は減少傾向であるが、資源水準は高位、動向は横ばいである。現状の漁獲係数で資源が維持されることから、現状の漁獲係数の維持を管理目標とし、Fcurrent(2010～2014)を管理基準として2017年ABCを算出した。なお、毎年約143万尾(2010～2014年の平均値)の種苗放流が行われ、0歳時の添加効率が0.024(2010～2014年の平均値)となると仮定した。

管理基準	Target/Limit	F 値	漁獲割合 (%)	2017年ABC (トン)	Blimit=
					親魚量5年後 (トン)
Fcurrent	Target	0.16	22	1,581	5,731
	Limit	0.20	26	1,909	4,529

- ABC算定には、規則1-3)-(1)を用いた
- Limitは管理基準の下で許容される最大レベルのF値による漁獲量。Targetは資源変動やデータ誤差に起因する評価の不確実性を考慮し、より安定的な資源の増大が期待されるF値による漁獲量。Ftarget = α Flimitとし、係数αは標準値0.8を用いた
- 2015年の親魚量は5,372トン
- Fcurrentは2010～2014年の平均値
- F値は1歳魚の値
- 漁獲割合は2017年のABC／資源量

資源評価のまとめ

- 資源水準は高位、動向は横ばい
- 2015年の資源量は7,559トン、親魚量は5,372トン

管理方策のまとめ

- 現状の漁獲係数の維持を管理目標とした

執筆者: 山本圭介・阪地英男

資源評価は毎年更新されます。